

▼「学者宮司」
一九三〇(昭和〇)年、神道考古学者の大場磐雄は、栃木県宇都宮の一荒山(ふたあらやま)神社を訪れている。

大場の頭の名には、解決のつかない問題があった。日光と宇都宮市の両方に「荒山神社」という同名の社があつて、ともかくこの国幣中社だが、「延喜式神名帳」には、「下野国河内郡一座大」として、「荒山神社一座だけを掲げている。ある学者は、日光山内の神社が式内社であり、また一宮でもあるとし、また別の者は宇都宮のそれをあて、互いに譲らないといつてゐる。

大場は自著に「一時の宮司は森口奈良吉という学者宮司の異称のある人物であつた……」と記している(『まづ』学生社)。森口は大場に付近から出土した古代祭器(滑石製の白玉、円盤や土師(はじ)器皿類)などを示しつつ、「数時間わたつて、当社を正しく延喜式内社であり、下野国一宮であることを熱心に説いたといふ。

▼「花会祭」映像

森口奈良吉(一八七五〜一九六八)については「民俗通信」の本稿でも幾度か触れている(203回「熊楠と奈良吉」、271回「奈良吉と奈良丸」、273〜275回「吉野群峯踏破記」、280〜281回「森口奈良吉と吉野離宮」)。森口は、奈良県東吉野村に生まれ、奈良女子高等師範学校(現、奈良女子大学)などで教員を務めた後、神職(春日大社、当時、春日神社)に転じた人である。京都の吉田神社の宮司から、荒山神社に転任したのは、一九三九(昭和九)年、五

文化

民俗通信

なら

十九歳の時。当時の神官の人事は、内務省が所管しており、辞令一枚で全国規模の異動が通例であつた。

森口は、自らの日誌に記録を残している。「宮中社吉田神社宮司正六位階六等森口奈良吉 国 是なのえさい」がある。

つい先日、思いがけないものが、奈良市の森口

二荒山神社「花会祭」と森口奈良吉

途絶した「児延年舞」

幣中社二荒山神社宮司被仰付 昭和九年三月二十六日 内閣。前任所掌の引き継ぎ、挨拶(あいさつ)まわり等を慌たたく済ませて、四月八日に夜行寝台で上京。翌九日着任。

早速、日誌に「当社境内約一万坪、社頭より宇

都宮市を脚下に見渡し、遠く富士筑波加波等の諸山を雲煙の間に認め、眺望頗る佳し」と記している。一日おいて十二日、同社の祭典「花会祭・はなのえさい」がある。

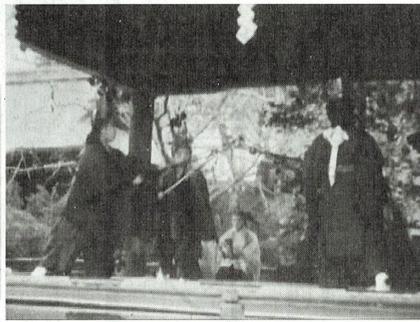
「残念なこと、この映像記録が伝える延年舞は、戦後の数年間までは奉納されてきたが、現在は途絶えており、祭典の際の献花神事のみ継承されているといふ。

▼鎮花祭・はなしすめ
鎮花祭は、春花の飛び交うころ、疫神が分散して人を悩ますので、これを鎮めるために行われたとされる。わが大和では、大神社とその摂社である狹井神社(四月一八日)や春日大社の垣の水谷(みずや)神社のほか、京都市北区の今宮神社(「やすらひ祭」、大津市の長等神社などの鎮花祭)が名高い。

折口信夫もまた、「日本の信仰では」春の花が早く散れば田のみのりが悪い兆と見、人の身に警嚇して悪疫流行の前ぶれと考へたからで、なるべく花を散らすまいと願つたのです。此れが鎮花祭の起り「です」としている(「山の霜月舞」『全集』二巻)。

折口は、さらに「三河の花祭り」に触れるなかで、①古い芸能では、延年舞の中にあること②花の稚児が花の枝をもつて出て舞うこと③花育ての行事は同時に花育てでもあること④この行事は子供(あるいは若者)がするようになることと述べている(同前書)。「二荒山神社の花会祭」を述べている(同前書)。「二荒山神社の花会祭」に興味深いものがある。

森口奈良吉が「二荒山神社の宮司を務めたのは、二年半という短か間だった。一九三六(昭和一一)年八月三日宮幣大社建部神社宮司被仰付(内閣)」の辞令ととも、宇都宮に多くの思いを残して、大津へ去つた。ついでに、



「花会祭」の延年舞(童子4人がホコを持ち舞う) 宇都宮二荒山神社提供

▼途絶した児延年舞
森口奈良吉は、祭りの様子を「宇都宮二荒山神社花会祭考」と題して、『栃木県神職会報』(第一三六号、昭和一〇年)に記している。

「この祭には純ひ初めた桜花二十四把を古式に基き宮司を中心に、神職并に児の舞人四人環列して、之を伝供した後、祝詞の奏上があり、終つて神楽殿にて児延年舞を奉奏する。映像にも、冠をいたとき、桜と椿の挿頭華(かさしほな)を著けた四人の子供が鈴を執り、また剣を持つて舞う様子が残されている。

二荒山神社の祭神は、豊城入彦命(とよきいりひこのみこと)。森口はまた、崇神天皇第一皇子である命(みこと)が夢に、御諸山の峰に登り東に向かつて八たび鈴を振り(八廻弄槍、八たび

研究員
次回回は11月1日付